

## 自閉症の方言使用に関する事例的検討

— 学齢期・青年期に方言使用が見られた5事例について —

松本 敏治<sup>[1]</sup>, 菊地 一文<sup>[2]</sup>

[1] 教育心理支援教室・研究所ガジュマルつがる, [2] 植草学園大学発達教育学部

松本・崎原・菊地・佐藤 (2014) は、「自閉症は方言を話さない」とする印象が全国で普遍的であることを報告している。しかしながら、共通語を使用してきた ASD が学齢期あるいは青年期において方言を使用するようになる事例が存在するとの報告が教員・保護者からあった。該当する5事例について、方言使用開始時期および対人的認知スキルに関する55項目についての質問紙を実施した。方言使用開始時期は、7歳、9歳、16歳、16歳、18歳で事例によって差がみられた。獲得されているとされた対人的認知スキルのうち、方言使用開始前後の時期に獲得されたとする項目数の割合は、26%～97%であった。また、それ以前に獲得されていた項目数と方言使用開始時期に獲得された項目数の割合を領域別で求めたところ、意図理解および会話の領域での伸びが顕著であった。これらの結果にもとづいて、ASDの方言使用と対人認知の関連について議論した。

**キーワード:** 自閉スペクトラム症, 方言, 対人的認知

### 1. はじめに

松本・崎原 (2011) は、青森県津軽地方の発達障害に関わる人々の間に存在する「自閉症は津軽弁を話さない」という噂をきっかけに、青森および秋田において教員をはじめとする発達障害に関わる人々を対象に自閉症 (ASD) の方言使用についての調査を行った。その結果、ASDが方言を話さないという印象が、青森および秋田において共通に見られることを報告している。さらに、青森の特別支援学校 (知的障害) において ASD と non-ASD の方言語彙使用について調査を実施し、共通語語彙の使用は両者で差がないものの、方言語彙の使用は両者で顕著な差があることを示した。その後、松本らは調査を全国に広げ、舞鶴・京都・高知・北九州・大分・鹿児島において同様の調査を行うとともに、国立特別支援教

育総合研究所の研修に全国から参加した特別支援教育担当教員に対してもアンケートを実施した (松本・崎原・菊地他, 2014)。その結果、「自閉症は方言を話さない」との印象は、北東北限定のものではなく、全国において普遍的にみられる印象であることが明らかになった。また、松本他 (2014) は、青森県において実施したのと同様の方言語彙使用調査を高知の特別支援学校 (知的障害) において行い、青森県と同様に ASD の方言語彙使用が non-ASD に比べて少ないとする結果を得た。

松本・崎原・菊地 (2013, 2015) は、2つの側面からこの現象について解釈を試みている。1つは、方言の社会的機能をもとにした方言と共通語の使い分けの側面からの解釈であり (松本・崎原・菊地, 2013)、もう一つは言語習得に関わる意図理解との関連である (松本・崎原・菊地, 2015)。佐藤 (2002)

によれば、人は相手との人間関係を維持するためにどのようなことば遣いが適切かを瞬時に判断して、グラデーションのようになった表現様式の中から適切なものを選んでいく。つまり、方言主流社会では方言は相手との人間関係を円滑にする道具として活用されており、方言を使うことは相手との心理的距離が近いと感じていることを表している。ASDの人々は、このような方言のもつ社会的機能を十分に理解できず、相手と自分との心理的距離に合わせた表現様式（方言）を使うことができない。もし、使用していたとしても、社会的機能を理解しない紋切り型の使用にとどまるであろう。しかしながら、自閉症の方言不使用という現象は、幼児期においてすでに見られることが指摘され（小枝，2007；木村，2009）、保健師への調査等でも明らかにされている（松本，2016）。健常幼児といえども、幼児期（3歳）に相手との心理的距離を理解して方言と共通語を使い分けているとみなすことには無理があることから、松本他（2015）は言語習得期におけるASDの方言不使用について次のような解釈を提出している。

松本他（2015）は、ASD幼児がテレビやDVDのキャラクターの真似はできるものの、家族の真似をしないという現象（Le Couteur, Lord, & Rutten, 2013）に着目し、この現象と方言の不使用を次のように関連させている。方言主流社会において、方言を話すのは家族を始めとした周囲の人々であるのに対して、共通語はテレビ・DVDなどのメディアにおいて使用される。方言主流社会の子どもは、周囲の人々が話す方言とテレビ・DVDやメディアなどを通じて流れてくる共通語という2つの言語表現にさらされることになる。定型発達（TD）の子どもたちは共同注意、意図理解、そして自己化をもとに周囲の人々のことばや表現様式を身につけていくようになる。自己化とは、人をそれぞれに特徴をもった個人としてとらえるようになり、その人らしい身振りやことば遣いをするのである（小山，2012）。定型発達（TD）の子どもはテレビキャラクターを特定の決めゼリフだけでなくその人物が言ったことが無いゼリフで

あってもその人であつたらあたかも言いそうな口調や身振りで模倣することができる。しかし、ASDの場合、テレビキャラクターの模倣は特定の決めゼリフやアクションに限定されている。模倣には、他者の意図や心的状態についての理解にもとづく模倣と、それが希薄な模倣（意図理解にもとづかない模倣）があり、TDは両者ともに可能であるがASDは後者の模倣が優勢となる。その為、テレビキャラクターの模倣であっても上述したような差が生じることとなる。つまり、他者の意図や心的状態の理解の不全は人々のことばの習得を難しくし、意図理解なしの模倣や連合学習的な習得が優勢になる。

松本（2017）は家族の中で本人だけが共通語を話すASDの青年について報告している。この事例では、共同注意、指差し、模倣、見立て遊び、ごっこ遊びに顕著な遅れが見られた。3歳後半からビデオの影響が強くみられるようになり、遊びにおいても人形を用いてビデオのシーンを再現したり、きょうだいとDVDの一場面をそのまま再現するようになった。2歳後半からは、姉の通信教育のビデオに出てくるページを読むようにせがみ、単語が増え始め、単語で要求ができるようになっていく。さらに3歳4ヶ月のところからは、DVDの中のセリフを現実場面に合わせて使うようになる。当初は、“元ネタがバレバレという感じだったのが次第に複雑になり、どのDVDのシーンからの流用かわからなくなっていった”ものの、＜自分のDVDのストックの中から一瞬にして引き出して言っている＞という印象を保護者は持っている。このようなDVDを通じた言語習得は、ASDの一つのあり方であるらしく、ドキュメンタリー映画「僕と魔法の言葉たち」の主人公オーウェンは、ディズニーアニメを通じて言語を習得していく。周囲の人々とのやり取りから言語を学ぶのではなく、DVD等のメディアから言語を学びそれを周囲とのコミュニケーションに適用するASDもいると思われた。

松本（2017）は、上述のようなTDとASDの言語習得にみられる違いは、方言主流社会において特有な現象ではなく、共通語を主流とする社会においても同様

に生じていると主張する。しかし、共通語主流社会では、周囲の人々が話すことばもテレビ・DVD等メディアのことばもともに共通語であるため、そのような差異に気づきにくく、共通語を話しているものの「ビデオやテレビのセリフのように話す」という印象になる。つまり、共通語主流社会でも方言主流社会においても、ASDの言語習得は、テレビ・DVD等メディアからの言語習得が優勢であるが、周囲の人々のことばとメディアからのことばの差異が顕著である方言主流社会では、その差異が“ASDは方言を話さないという”印象となっていると指摘する。

このような意味で、ASDの方言不使用という現象の研究は、方言主流社会であるか否かにとどまらず、ASDの言語習得過程を検討する上で有意義であると考えられる。方言と共通語の差異は、一般の人々にとっても気づきやすく、調査等において指標として利用しやすい。

また、方言を話すASDも存在するものの、先に述べたように相手との心理的距離の変化などに応じてことば遣いを柔軟に変えていくことは難しいと思われる。これらについて、松本(2017)は、以前は“アスペルガー”と診断されていたようなASDの場合、社会性の障害がそれほど重度ではなく一定の意図理解が可能で、周囲の人々とのやり取りから言語を習得できる。しかし、より複雑な意図および心的状態の読み取りが困難であるため、自分と他者との心的距離に応じて、方言と共通語を切り替えることに困難を抱えているのだろうと解釈している。

このことは、方言と共通語の使用という側面から見れば、ASDには、少なくとも1)方言を話さず共通語を話す、2)方言(あるいは方言と共通語)を話す、という2つのタイプが存在することとなる。ただし、知的に高いASDの場合、実際に心理的距離の理解にもとづく方言と共通語の使い分けはできていなくとも、状況や場面をもとに使い分けることが可能なものもあると思われる。一方、TDやID(知的障害)の場合は、周囲の人々のことば(方言)を習得し使

用しながら、メディア等で知り得た共通語をごっこ遊び場面や公的場面(学校)などで使用するようになる。

ところが、ある特別支援学級の教員から、共通語で話していた生徒が、ある時期から方言を話すようになったとの報告があった。このような事例が存在するならば、それは何を意味すると考えたらいいだろうか。上に述べたように、ASDの方言と共通語の使用については、大きく2つのタイプを考えることができた。それまで共通語を話していたASDが突然に方言を話すようになることは本当にありうるのか。もし、ありうるとすればどのような条件の下でなのか。松本他(2015)および松本(2017)は、周囲のことば(方言)を学習し使用するためには、共同注意、意図理解にもとづく模倣、そして自己化が重要であると述べている。当初、共通語を使用していたが、ある時期から方言を使用するようになった事例では、このような社会性のスキルの改善がなされた結果なのか。それともそれとは別なあり方で方言を使用するようになっているのか。

本研究では、方言主流社会で共通語を話していたがある時期から方言を話すようになったとの報告があったASDの5事例について、社会性の発達(対人スキル・対人認知スキル)の変化を教師および保護者の報告をもとに分析する。本研究の主たる目的は、方言を話すようになったASDにおいて、共同注意、意図理解、自己化などを始めとした他者への関心や心的状態の理解に変化がみられたかどうかについて検証することである。より明確に言えば、方言使用に相前後して他者への関心や他者との関わりに変容がみられたかどうかである。

もし、方言を話すようになったASDにおいて他者への関心や関わりが変化したのであれば、ASDにおいても他者への関心や関わりを促すことが周囲のことば(自然言語)の習得へつながる可能性を示すこととなる。もう一つ重要な点として次のようなことが考えられる。TDの言語習得が自然言語(周囲の人のことば:方言)が基礎となり、その後学習言語

の習得がなされると考えられるのに対して、一部の ASD では学習言語の習得が先行し、その後社会性の発達が改善された場合に自然言語の習得が生じるという逆転現象が起きている可能性が示唆される。

## 2. 方法

### 2.1 調査参加者

調査対象者は ASD 5 名。回答者は、保護者および方言使用出現時に担任・療育担当であった教員。

調査対象者：A は特別支援学級在籍の小学生男子 8 歳、自閉スペクトラム症、DQ58（新版 K 式）、家族の使用する方言は関西弁、居住地は関西。B は、特別支援学級（情緒）在籍の小学生女子 10 歳、アスペルガー症候群、IQ89、家族が使用する方言は九州弁、居住地は九州。C は、特別支援学校高等部に在籍する男子高校生 17 歳、自閉症、DQ78（新版 K 式）、家族の使用する方言は関西弁、居住地は関西。D は、ホテルに勤務する男性 20 歳、特別支援学校高等部卒業、自閉症 / 知的障害、DQ68（新版 K 式）、家族の使用する方言は関西弁、居住地は関西。E は、飲食業従事の男性 23 歳、特別支援学校高等部卒業、自閉症、IQ82、家族の使用する方言は関西弁、居住地は関西。

### 2.3 倫理的配慮

A については、担任より学会において接触があり、担任を通じて依頼し保護者から承諾を得た。B については、保護者の知人から情報提供があり、メール

にて保護者に確認を行ったのち依頼し承諾を得た。C および E は、著者の協力依頼に応じて担任・療育担当者より申し出のあったもので、C では保護者 E では本人の承諾を得た。D は、従前よりの研究協力者であり（松本，2017）、依頼し保護者・本人ともに承諾を得た。回答者には本論文草稿を送付し、記載等に問題がないかの確認を行い、問題なしとの返答を得た。資料は、主著者以外が立ち入れない部屋のキャビネットに保管し管理している。

### 2.2 質問紙

質問紙は、日本語版 Vineland- II 適応行動尺度（Sparrow, Cicchetti, & Balla, 2005）、PARS-TR（発達障害支援のための評価研究会，2013）、日本語版 M-Chat（神尾・稲田，2006）などの項目のうち対人関係と言語に関連する項目と、松本・菊地・清野（2018）が指摘する意図理解・調整・参照行動を参考に作成した。全部で 61 問、うち選択式 57 問。記述式 4 問である。選択式のうち 2 問は、方言と共通語の使用に関するものである。残り 55 問は対人的スキル・対人的認知スキルに関連する項目で、ことばの使い分け 4 問、家族および友達との余暇活動 2 問、周囲への興味・関心等 7 問、感謝・謝罪の表現 2 問、会話の継続性ややり取り 9 問、模倣（セリフや口調）3 問、模倣（ごっこ遊び等）3 問、共同注意 5 問、他者の意図理解 5 問、意図参照等 10 問、意図調整等 5 問。これらの質問については、S「方言を話すようになった前後（1 年以内）で、まあできるようになった、または見られるようになった」、O「方言を話すようになる 1 年以上前から、まあできていた、またはまあ見られた。」、X「現在もあまりできない、またはあまり見られない」、?「わからない」を選択肢として用意した。

記述式の質問は、「方言を話すようになったきっかけと思われる出来事がありましたらお書きください。」「上記以外で、方言を話し始めた時期における本人の変化がありましたら、お書きください。」「方言を話し始めた時期の環境や周囲の対応の変化があ

表 1 対象者

対象者	A	B	C	D	E
年齢	8 歳	10 歳	17 歳	20 歳	23 歳
方言使用開始年齢	7 歳	9 歳	16 歳	18 歳	16 歳
所属 / 職業	特別支援学級	特別支援学級	特別支援学校高等部	社会人	社会人
診断	自閉スペクトラム症	アスペルガー症候	自閉症	自閉症, 知的障害	自閉症
IQ/DQ	DQ58	IQ89	DQ78	DQ68	IQ82
居住地	関西	九州	関西	関西	関西
回答者	担任	保護者	担任	保護者	療育担当者



りましたら、お書きください。」「方言を話し始めた時期の家族との関係の変化がありましたら、お書きください。」の4問であった。

### 2.3 実施時期

20XX年3月下旬～4月上旬に、事例Aの担任、事例Bの保護者、事例Cの以前の担任、事例Dの保護者、事例Eのもと療育担当者にメールにて質問紙を送付し回収した。その後、質問紙の結果をもとに、事例AおよびDについては追加で面談を行った。

## 3. 結果

### 3.1 方言使用開始時期

方言使用開始年齢は、それぞれ7歳、9歳、16歳、18歳、16歳と評価された(表1)。

### 3.2 対人的スキル・対人的認知スキル

対人的スキル・対人的認知スキルに関わる55項目について、対象者ごとに“S:方言使用開始時”、“○:既獲得”、“×:未獲得”の割合を図1に示した。方言使用開始時獲得(S)項目割合は、CとAでもっとも多く58%にのぼり、もっとも少ないDでは16%であった。既獲得(○)項目割合は、Aではもっとも少なく2%にとどまるが、Bではもっとも多く56%であった。5名全員では、方言使用開始時獲得(S)項目割合は35%、既獲得(○)項目割合は26%であった。

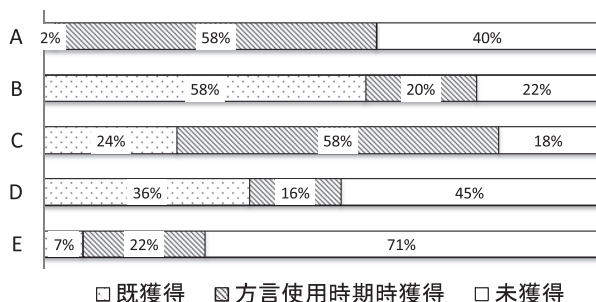


図1 各被験者の対人的スキル・対人的認知スキルの獲得時期

また、調査時点までに獲得されていた項目数に対する方言使用開始時獲得項目数の割合 (S/(S+○)) で見てみると、Aは97%、Bは26%、Cは71%、Dは31%、Eは75%であった。どの対象者でも、本質問紙で取り上げた対人的スキル・対人的認知スキルのうち現在獲得されているものの4分の1以上が方言使用開始時に獲得されたと評価された。

項目別に見てみると表2にあげた7項目は、全員で獲得(S+○)されていた。“周囲の人に興味をもっている”“他者への気遣いがある”“周囲の人々の特徴的なセリフの口真似”“他者の提案や依頼に対してのうなずき・身振り・ことばでの反応”は、5名中3名で方言使用開始時に獲得されており、“興味をもったものを指差す”は2名で方言使用開始時に獲得されているとされた。一方、“他人の注意をひこうとする反応”“他者の顔を見て反応を確認する”は、4名で方言使用開始時以前に獲得されていた。

表2 対象者全員で獲得しているとされた項目

項目	A	B	C	D	E
周囲の人に興味を持っている	S	○	S	○	S
他者への気遣いがある	S	○	S	○	S
周囲の人々の特徴的なセリフの口真似	S	○	S	○	S
『○○しよう』『こうやってみたら』などの他人の提案や依頼に対して、うなずき・身振り・ことばで反応する	S	○	S	○	S
興味をもったものを指差す	S	○	○	○	S
他者の注意をひこうとする様子がみられる	S	○	○	○	○
他者の顔を見て、反応を確認する	S	○	○	○	○

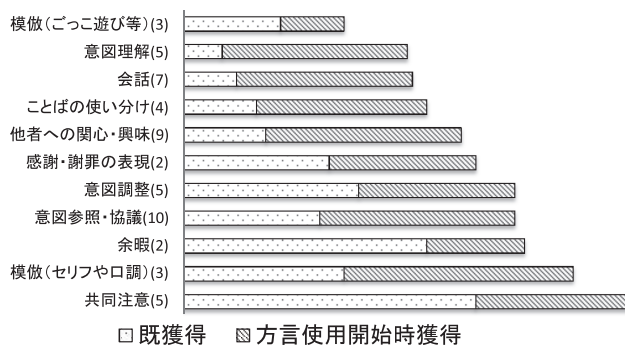


図2 領域ごとのスキル獲得時期

領域ごとの既獲得項目割合と方言使用開始時獲得項目割合を図2に示した(括弧内は項目数)。“共同注意”および“模倣(セリフや口調)”の項目の8割は、本調査までに獲得(S+○)されていた。一方、“模倣(ごっこあそび)”“意図理解”“会話”“ことばの使い分け”は、○とSを合計しても5割以下であった。

領域別に既獲得項目数に対す方言使用開始時獲得項目数の比(S/○)を求めた結果を図3に示した(括弧内は項目数)。“意図理解”がもっとも高く4.5,“会話”が3.20でそれに続いた。“他者への関心・興味”および“ことばの使い分け”は,2を超えた。一方,“意図調整”“模倣(ごっこ遊び等)”“共同注意”“余暇”は,1を下回った。

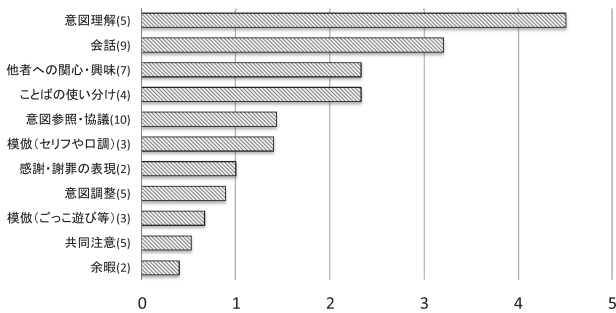


図3 方言使用開始時獲得項目数÷既獲得項目数

### 3.3 方言を話すようになったきっかけ

これ以降は、自由記述での回答について記載するが、全文を引用はせず抜粋とする(表3)。方言を話すようになったきっかけについては、Aでは、「友達と一緒に過ごすことを意識し始めたから(人と暮らすことが心地よくなってから)」, Bでは、「交流級のクラスメイトや親しくない生徒とでも普通に会話するようになった」, Cでは「就学旅行などで、指導者・友達にも慣れた環境になったのか、その後にクラスで関西弁を話したところ、みんなが面白がってくれた」, Dでは「サークルを通じて知り合った友達と、弟がグループラインを始め、Dも興味を持ち始め、彼らとグループ行動をしたり、ラインに入って会話するようになった」, Eでは「安心した環境の中で、すこしずつ友達と遊ぶことも増え、生徒会に立

候補したり、修学旅行にいたりする2学期の中盤から時々、慣れた指導者や友達に関西弁で話す・・・。カラオケでの外出では、関西弁で話すことでみんなから笑いを取り一層関西弁で話すことが楽しくなった」との回答があった。

表3 方言を話すようになったきっかけ

A	友達と一緒に過ごすことを意識し始めたから(人と暮らすことが心地よくなってから)
B	決定的なきっかけはないが、場面緘黙がみられなくなり、交流級のクラスメイトや他の生徒と普通に会話するようになった
C	修学旅行で、指導者・友達に慣れ、その後クラスで方言を話したところ、みんなが面白がってくれた
D	サークルを通じて知り合った友達と、グループ行動をしたりラインに参加するようになった
E	安心した環境で、友達と遊ぶことが増えた。就学旅行で指導者や友達に方言で話すことがみられた。タメ口も覚えて話すようになった。

### 3.4 方言使用開始時期の本人の変化

方言を話し始めた時期における本人の変化については次のような回答があった。A:「自分から友達に逢いたくて帰ってくる時に通る道で待っていたり、自分から手を振ってみたいと手を振る練習をしたり、自分が描いた絵を見てもらいたくて友達に見せる練習をしたり、新しい友達ともコンタクトを取りたいという気持ちが芽生えています。」B:「自然なコミュニケーションが取れて方言が出るようになってきた9歳頃から、お友達と放課後に遊ぶ約束を自分でしてくるようになった。」C:「それまでは人への興味・関心が薄かったが、それ(方言使用開始時)からは友達への興味を持つことが増えた。また実際的な関わりも増えたように思います。」D:「(学校卒業後)特別支援学校時代の友達と会いたがり、同窓会には必ず出席し、誘い合わせて焼き肉に言ったり、回転寿司に行ったりするようになりました。」E:「こだわりが強く、ずっと黒い服しか着なかったが、緑のTシャツを着ることもできるなど、言葉だけでなく、外見でも変化がみられるようになってきた。」

### 3.5 方言使用開始時期の環境や周囲の対応の変化

方言使用開始時の環境や周囲の対応の変化については、次のような回答があった。A:「上級生たちは、一切遠慮なく、強引に『一緒に活動しよう』と誘うようになった。誘い始めた時期は訛りだす少し前くらい。」B:「交流学級には仲の良い子ばかりを一緒にのクラスに配置してもらえ、・・場に馴染むことができたようだ。・・状況理解ができるようになり交流学級で発言をすること、クラスメイトと気軽に会話をすることが一気に増え、相手の話す方言が出るようになった。」C:「それまではクラスメイトもちよっと変わった子という目で見ても、あまり自発的に関わろうという子は少なかったが、それからは少しずつ自発的に関わりを持つ生徒が増えた。」D:「自分からアクションを起こさなくても友達や先生からいろんな楽しいことを得られていた学生時代と異なり、自分が動かなければ好きな友達と過ごす機会が得られない、という生活が変わった」E:「周りの友達とのネットワークが広がり、クラスの違う友達も気軽に本人に話す機会が増えてきた。」

### 3.6 方言使用開始時期の家族との関係の変化

方言使用開始時の家族との関係の変化については次のような報告があった。A:「家で今まで以上にしゃべるようになった。」「兄と一緒に学校であったことを会話している。」「学校であったことを再現している。」B:「家族との関係の変化はなし。」C:「家でも同時期に母親に対しては関西弁で話すことがみられるようになった。」D:「姉の発案で家族ラインをはじめた。なぜか、姉を中心にして兄弟3人で会話が弾んでいることが多くなった。・・サークル活動の充実などからかなり明るくなった。」E: 記載なし。

## 4. 考察

松本他 (2013, 2015) および松本 (2017) は、ASD が方言使用に困難を示す理由として、1) ASD は意図をはじめとした他者の心的状態を理解し模倣する

ことに困難があり、周囲の人々との交流を通じて周囲の人々が話すことば(方言)を習得するのが難しい、2) 社会性の障害のため、心理的距離の維持・調整ということば遣い(共通語か方言か)のもつ社会的機能が理解できず方言を使用しない、の2つを挙げている。

しかしながら、いわゆる“アスペルガー”と呼ばれる人々の中には方言を話すものもいるとの指摘もある。ただ、このような人々も方言と共通語の柔軟な使い分けには困難を示す傾向がある。単純な意図や心的状態が可能であるため周囲の人々のことばを習得できても、他者との心理的距離のような複雑な心的状態を適切に理解することが困難なためであろう(松本, 2017)。

以上のように、松本他 (2013, 2015) および松本 (2017) は、周囲の人々が使用することば(方言)を習得するためには、他者の意図や心的状態についての一定の理解が必要と仮定している。本研究では、それまで共通語使用が主であったものが学齢期・青年期に方言を使用し始めた事例について、対人的スキルや、他者の意図や心的状態の理解を含めた対人的認知スキルが方言使用開始時に前後して変化がみられたか否かを明らかにする目的で、質問紙を実施した。

本研究で用いた質問紙は、Vineland-II, PARS-TR, M-Chat の対人関係と言語に関連する項目と、松本・菊地・清野 (2018) が指摘する意図理解・調整・参照行動をもとに作成されたもので、標準化はされていない。また、領域の分類についても因子分析の手続きをとってはいない。そのため得られたデータについての解釈は限定的なものにとどまる。本研究の目的は、前述したように方言を使用するようになったとの報告があった少数事例についての対人的スキル・対人的認知スキルに関する情報を収集することであり、一般的な対人的スキル・対人的認知スキルの質問紙作成を意図したものではない。各対象者が示した全体の対人的スキル・対人的認知スキルの獲得の割合が同年齢集団に対してどのような関係にあ

るかは明らかでないし、ASD 群の中での位置づけについても不明である。5名の対象者の年齢がさまざまであることから、獲得項目の割合をもって対象者のASDの特性の濃淡について比較したり言及することもできない。また、領域ごとの獲得項目の割合についても、標準化や因子分析も行われておらず母集団の特性が不明であるため、領域間での獲得項目割合の差を比較してそれぞれの個人の特性ということもできない。

本質問紙の持つ最も重要な情報は、質問紙に含まれる項目が、方言使用開始以前から獲得されていたか、方言使用開始時前後の時期に獲得されたかである。次に、重要と思われるのは領域ごとでの既獲得項目数と方言使用開始時獲得項目数の比率についての情報である。これは、方言使用開始時に対人的スキル・対人的認知スキルに変化が生じたか否かについての一定の情報を与えてくれる。

このような視点で本結果を見ていくと、「方言使用開始時獲得項目数 (S) ÷ (方言使用開始時獲得項目数 (S) + 既獲得項目数 (○))」は、Aは97%、Bは26%、Cは71%、Dは31%、Eは75%であり、方言使用開始時に相前後して対人的スキル・対人的認知スキルの獲得が進んでいる様子が伺える。また、方言使用開始時の年齢が、7歳、9歳、16歳、18歳、16歳であることから、このようなスキルの獲得が、少なくとも児童期にとどまらず青年期においても急激に行われる可能性を示している。

対象者全員において獲得されていると評価された項目 (S/○) としては、「周囲の人への興味」「他者への気遣い」「(他者の) 特徴的なセリフの口真似」など他者への興味関心と、「提案や依頼に対するうなづき・身振り・言葉での反応」の他者への自己の意志の表現、「他者の顔を見て、反応を確認する」「興味をもったものを指差す」「他者の注意を引こうとする」など共同注意に関するものが見られる。Aにおいては、これらの項目の獲得は、方言使用開始時に集中しているし、CとEでは人への興味関心や自己意志の表明が方言使用開始時に獲得されている。こ

れらの対人的スキル・対人的認知スキルは、ASDが方言を使用できるようになるための必要条件の一部なのかもしれない。

領域に分けた分析については、先に述べたような限界があり、領域間の獲得の割合の比較自体はあまり意味を持たない。しかし、共同注意については、M-Chatなど既存のチェックリストからなる項目で構成されており妥当性が高いと考えられる。9割が獲得されているとする結果は、すべての対象者で獲得されている項目の中に共同注意に関連する項目が3項目が入っている事実を合わせて考えるなら、共同注意は方言使用の必要条件とする見方を支持していると思われる。

領域別に、方言使用開始時の獲得項目数と既獲得項目数の割合をみたところ、意図理解の領域では方言使用開始時の獲得項目数は既獲得数の4倍をこえていた。この質問紙での意図理解の項目は「他人の行動の目的がわかり手助けする」「大まかな指示でも何を期待されているかがわかり自分から動く」「家族・同級生などの行動から、目標がわかり手伝う」「他人の行動からその目標がわかったと思われる行動が見られる」「他者の行動からその具体的なプラン(行動)を自発的に推測できる。繰り返し教えられたような行動は除く」の5つである。内容的には、意図を「目標・プラン・調整」として捉え(長崎・中村・吉井他, 2009)、意図理解を“他者の行動から目標を推論すること”、および提示された“目標から(他者が取るであろう)行動の推測すること”の2つと指定した質問である(松本, 2018)。これら意図理解の項目については既獲得であったとするものは、Cで1項目、Dで1項目合計2項目のみであるが、方言使用開始時に獲得されたとするものは、Aで3項目、Bで1項目、Cで4項目、Eで1項目、合計9項目であった。ただ、Dでは5項目中一項目「他人の行動の目的がわかり手助けする」が既獲得とされたが、他は未獲得・不明とされており、対象者による差は大きい。

会話領域は7項目からなり、意図理解に次いで方言使用開始時期の伸びが顕著である。全対象者で少



なくとも1項目以上(Aは2, Bは5, Cは4, Dは2, Eは1)は、方言使用開始時に獲得されたものであった。ただし、「会話で話題にのっていきける: 脇道にそれない」「10分間、会話が続けられる」の2項目は、対象者Cで方言使用開始時に獲得されたのみで他の対象者は未獲得であり、柔軟な場面に応じた会話についてはCを除いては未だ困難を抱えている様子が伺えた。

以上のことから、方言使用開始時の年齢が大きく異なるにもかかわらず、方言使用開始時に対人的スキル・対人的認知スキルの獲得が顕著に認められるといえる。より細かく項目・領域別で見た場合には、意図理解や会話などのスキルの獲得が顕著であるが、明白な結論のためにはより多くの対象者に対する調査が必要である。

ここからは自由記述の回答をもとに考察を進める。方言を話すようになった“きっかけ”として、同級生や職場の仲間など家族以外の人々との関係の変化が挙げられる。身近な観察者でもある保護者や教員によれば、対象者の方言使用のきっかけとなった出来事はより身近で数年から十数年にわたって彼らの側で方言を話しかけたり話していた家族ではなく、同級生や職場などの同世代の人々との関係性の変化であると捉えている。方言使用開始時には、上級生・同級生・クラスメートなどとの関係が変化し、対象者自身もそれらの人々と関わりをもとめるようになりネットワークが広がっている様子が見て取れた。

家での様子については、対象者によって回答は異なっていたが、Bを除けば、家族との会話が増えたり、方言で話しかけたりなどコミュニケーションの改善と思われる記載がみられた。

ここまでの結果をまとめると、それまで共通語を話していたASDが方言を話すようになる場合、1)方言使用開始の時期は、少なくとも学齢期から青年期までの幅をもっている、2)方言使用開始時の前後において、対人的スキル・対人的認知スキルの獲得が顕著に見られる、3)家族以外の同級生や同年代の友人との関係の変化がきっかけとして認識され

ており、4)他者への興味・関心の増加や他者への気遣いが一定程度獲得されている、ことが挙げられる。

回答者が“きっかけ”として記載していることから、同年代と“安心して”関われる環境の中で対象者自身が他者との関わりを求めていき、方言を使用することで、さらに周囲との関係を変化させていった様子が伺える。その意味では、今回取り上げた事例にとって、方言使用は相手との心理的距離の調整という役割(方言の社会的機能)が主になっていると考えられる。対人的スキルとしてのことば遣いの意味を理解し始めているとも考えられ、方言の使用開始時に対人的スキル・対人的認知スキルの獲得が顕著であることも納得できる。

その意味では、TDの子どもが言語習得期に周りの人々のことば(方言)を学習し使用するようになるのは機序は異なるのであろう。いわば、TDの子どもや大人が、転居によってその土地の方言をその地域や地域集団に帰属するための手段として用いるのに似ているかもしれない。

松本(2017)は、ASDはメディアや組織的学習を通じてことばを学習しているため、共通語を使用すると主張している。彼らは、そこで学んだことば(共通語)を用いて、家族や教師など身近な人と関わり、自分の要求を伝えることができる。共通語で話すからといって家族との関係が大きく変わることはなく、学校や職場でも共通語を使って他者と関わってきた。方言主流社会であっても、単に自らの要求をかなえるためや必要な情報を伝えるだけならば、共通語使用でも問題はなかったであろう。

しかし、他者への関心が高くなり他者の様子を意識できるようになる、つまり相手との関係性(心理的距離)に気づき始めるようになると事情が変わってくる。この時期になにかをきっかけに方言の使用によって相手の自分への態度が変わることに気づいた。

方言の社会的機能説では、ことば遣いは相手との心理的距離によって変化するものであり、ことば遣

いは心理的距離の維持・調整の働きをもつと考えられる。繰り返しになるが方言を使うか共通語を使うかで家族との関係には変化が生じることはない。しかし、家族以外の人々特に同世代との関係では、方言の使用は他者との関係性に大きな影響を及ぼす。

本研究で取り上げた事例では、方言と共通語の使用順序はTDとは異なる。TDにおいては自然言語である方言を習得した後に、公的な場面や見知らぬ相手に対しての共通語を使用することを学ぶと考えられる。しかし、ASDの一部は、家族に対してさえ共通語を使用していたものの、同世代との対人関係に変化がみられることで方言を使用するようになっていく。方言と共通語の使用順序の逆転現象がASDにおいて見られた。

TDの子どもは自然言語として方言を獲得し使用するようになるが、自然言語として方言を獲得できなかったASDの中には、社会的機能としての方言の働きに気づき方言を使用するようになる場合があることが示唆される。

## 文献

発達障害支援のための評価研究会（安達潤・井上雅彦・内山登紀夫・神尾陽子・杉山登志郎・辻井正次・行廣隆次 顧問 市川宏伸・栗田広）編著（2013）PARS-TR 親面接式自閉スペクトラム症評定尺度 テキスト改訂版。スペクトラム出版社。

神尾陽子・稲田尚子（2006）1歳6ヵ月健診における広汎性発達障害の早期発見についての予備的研究。精神医学 48(9), 981-990.

木村直子（2009）幼児健康診査における「発達障害」スクリーニングの手法。鳴門教育大学研究紀要, 24, 13-19.

小枝達也（2007）広汎性発達障害・アスペルガー障害。母子保健情報, 55, 28-32.

小山 正（2012）初期象徴遊びの発達の意義。特殊教育研究, 50(4), 363-372.

Le Couteur, A., Lord, C., & Rutter, M. D. (2013) ADI-R 日本語版 マニュアル (監修). ADI-R 日本語版研究会監訳, 土屋賢治・黒田美保・稲田尚子. 金子書房.

松本敏治 (2016) 自閉スペクトラム症幼児および定型発達幼児の方言使用について - 青森県津軽地方の保健師への調査から -. 弘前大学教育学部紀要, 115, 83-88.

松本敏治 (2017) 自閉症は津軽弁を話さない 自閉スペクトラム症のことばの謎を読み解く. 福村出版.

松本敏治・菊地一文・清野宏樹 (2018) ASD のコミュニケーションにおける意図の問題 - 意図理解・調整・参照 -. 植草学園大学研究紀要, 10, 9-20.

松本敏治・崎原秀樹 (2011) 自閉症・アスペルガー症候群の方言使用についての特別支援学校教員による評定-「自閉症はつがる弁をしゃべらない」という噂との関連で-. 特殊教育学研究, 49, 237-246.

松本敏治・崎原秀樹・菊地一文 (2013) 自閉症スペクトラム障害児・者の方言不使用についての理論的検討. 弘前大学教育学部紀要, 109, 49-55.

松本敏治・崎原秀樹・菊地一文 (2015) 自閉スペクトラム症の方言不使用についての解釈 - 言語習得から方言と共通語の使い分けまで -. 弘前大学教育学部紀要, 113, 93-103.

松本敏治・崎原秀樹・菊地一文・佐藤和之 (2014) 「自閉症は方言を話さない」との印象は普遍的現象か-教員による自閉症スペクトラム障害児・者の方言使用評定から-. 特殊教育学研究, 52(4), 263-274.

長崎勤・中村晋・吉井勘人・若井広太郎 (編著) (2009) 自閉症児のための社会性発達支援プログラム - 意図と情動の共有による共同行為 -. 日本文化科学社. (pp. 22-23)

佐藤和之 (2002) 人はなぜ方言をつかうのか. 國文學, 47(11), 88-95.

Sparrow, S. S., Cicchetti, D.V., & Balla, A. B. (2005) Vineland Adaptive Behavior Scale, Second Edition. NCS Pearson. 辻井正次・村上隆日本語版監修, 黒田美保・伊藤大幸・荻原拓・染木史緒日本語版作成 (2014) 日本語版 Vineland - II 適応行動尺度. 日本文化科学社.

## Abstract

### **Autism and Local Dialect Usage: A Study of Five Cases in Which Usage Commenced During the Elementary School Age or Adolescent Periods.**

Toshiharu MATSUMOTO<sup>[1]</sup>, Kazufumi KIKUCHI<sup>[2]</sup>

[1] Gajumaru Tsugaru: Institution of Support for Individuals with Developmental Disabilities

[2] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

Matsumoto, Sakihara, Kikuchi, et al. (2014) stated that although it has been reported that it is generally accepted in Japan that people with autism do not speak in the various regional dialects, there have also been accounts by educators and guardians that contradict that perception. They tell of the existence of cases in which children with Autism Spectrum Disorder (ASD) who had already been communicating using the standard Japanese language, began to use a local dialect after reaching elementary school age or adolescence. Five such cases were investigated using a questionnaire regarding the timing of the acquisition of usage of a local dialect, as well as 55 items regarding interpersonal cognitive skills. Differences were seen in the ages at which the subjects initially began using dialectal language, with one each doing so at ages 7, 9, and 18, and the remaining two at age 16. Of the total interpersonal cognitive skills that were reported to have been acquired by each subject, the percentage in which the acquisitions had occurred around the same period as the commencement of dialect usage ranged from 26 - 97%. In addition, when considering the types of skills that had already been acquired before initial usage of dialects, and those acquired concurrently with initial dialect usage, remarkable growth was seen in the areas of comprehension of intent and of conversational ability. Based on these results, the current paper discusses the relationship between usage of local dialects and interpersonal cognition in people with ASD.

**Keywords:** ASD, Local Dialect, Interpersonal cognition